

[文教大学]

大学ブランディングと地域連携 —公式マスコットキャラクターを活用した事例—

西村 美佳 学校法人文教大学学園経営企画課

1 大学公式マスコット キャラクターの誕生

文教大学に公式マスコットキャラクターが誕生したのは2016年である。大学創立50周年記念事業の一環として、「文教大学をイメージした、多くの方に親しまれるマスコットキャラクター」のデザインを募集し、109点の応募作品の中から、卒業生がデザインした「BUNKO」が選ばれた。「BUNKO」は本学の建学の精神「人間愛」にちなみ、分かち合う幸せや人との絆・繋がりを表した「あなたとはんぶんこしたハート」を持っている。学生や教職員など学内者に広く知られており、昨年度学内で行った「広告イメージ調査」では

93%以上の認知率を得た。そこで、大学ブランディング事業の一つとして、「BUNKO」の力を借りた施策を検討することとなった。

2 新キャンパス開設と連動したグッズ製作

「BUNKO」を用いた大学ブランディング事業の一つとして、身近に置いて活用してもらうためのグッズ化を行うこととした。グッズ内容を検討する際、同時期に進行していた本学新キャンパス「東京あだちキャンパス」開設（2021年4月）と連動した企画として、両方を同時に盛り上げるグッズを作りたいと考えた。新キャンパスを開設する東京都足立区は、2千以上の工場があるものづくりの地域であり、区内産業の優れた製品・技術を「足立ブランド」として認定している。その足立区のものづくり技術と「BUNKO」普及を掛け合わせたグッズとしてブックカバーの製作を検討し、足立区千住で着物にも洋服にも合う鞆を一つ一つ手づくりしている「渡邊鞆」に快諾していただいたことでコラボレーションが実現した。製作にあたっては、デザインを本学が担当し、ブックカバーの仕様は

「渡邊鞆」に担当していただき、約半年で完成となった。デザインは、本を読んでいる「BUNKO」と一緒に「BUNKO」の手を配置することにより、本を開くと読者の手と「BUNKO」の手が重なり「BUNKO」が読んでいるように感じられる絵柄になっている。「BUNKO」の親しみやすさを表したい、多くの人に手にしてもらえるグッズを作りたいという本学の想いと、帆布の質感の良さや使いやすさを慎重に検討してくださった「渡邊鞆」の想いが重なった、オリジナル商品「BUNKOの文庫カバー」が完成したのである。

3 大学ブランディングの一助として



文教大学
公式マスコットキャラクター

ブックカバーは完成後、2019年秋から大学の購買部で販売している。紺・カーキ・赤の3色があり、売上も順調に推移している。他にも、卒業生が芥川賞・直木賞を2018年に続けて

受賞したことに伴う紀伊國屋書店特別イベントにおける販売や新聞取材など、予想外の反響を得ることができた。帆布の質感と落ち着いた色使いのブックカバーは、使うほどに良さがわかる一品となっている。足立区の企業とコラボレーションできたことにより、新キャンパス開設を盛り上げる一助となるとともに、少なからず大学ブランドを高めることができたと考えている。また、学内製作だけでは達成できなかった話題性が生まれ、今後に繋がる地域との絆づくりの端緒となったのではないだろうか。来年4月に開設される新キャンパス内や足立区内で「BUNKOの文庫カバー」をつけて読書している人を多く目にするのがとても楽しみである。



「BUNKOの文庫カバー」 詳細は文教大学HPよりご確認ください。
https://www.bunkyo.ac.jp/about/public_relations/goods/

[中京大学]

ブックカバー作成に見る広報隊活動

中山 恵子 中京大学図書館長 経済学研究科長

1 “図書館広報隊”

本学図書館では、近年話題にのぼる学生協働施策にかねてより力を注いできた。本学でその枢軸となるのが、図書館広報隊である。広報隊は全て学生ボランティアで組織され、原則、半期または1年を任期とし、半期ごとに募集される。広報隊には、図書館運営の一環を担う活動が要請される。このため、学生のキャリア形成をはじめ学生目線を取り入れた図書館サービスの改善、図書館の認知度の向上などが活動を通じて期待される。

広報隊の活動は、主として学生ならではのイベントの企画・開催であり、図書館職員は企画への助言、備品の発注などの補助

的立場に徹し、企画の円滑な遂行を下支えしている。

広報隊の具体的活動としては、今や大学は言うに及ばず、高等学校・中学校にも普及しつつあるビブリオバトル―知的書評合戦―や、館内トークイベントなどが挙げられる。特に昨年のビブリオバトルは、図書館司書課程在学生とのタイアップ開催となり反響も大きかった。他にも館内トークイベントをはじめ、広報隊の活動は多岐にわたるが、今回はその一つ、展示会を例に挙げたい。

2 展示会におけるブックカバーの展示・配布

展示会は年に3回程度、館内の一部を利用して開催される。主役はもちろん図書館広報隊である。

まず、季節や世情を反映した展示テーマ（『雨の日に読む本』、『雪』、『筋トレ』など）を設定し、その後は展示班と作成班に分かれての作業となる。展示班は展示会までの日程調整からはじまり、展示方法やテーマに関連する図書の見出し収集、購入手続きなどの細かな作業を経て、テーマに沿ったポップ、ポスター、案内チラシも準備する。中でもメンバーの日程調整が最大の難関のようである。一方、

作成班はテーマの具現化に頭を痛めつつ、展示会当日に展示をするとともに、無料で配布するブックカバー、葉、フリーペーパーなどの作成にあたるが、請求記号を模すデザインや既存図書を虹のアーチに見立てての撮影など、毎回学生らしさの際立つ工夫が施されている。

展示会は学生のみならず一般市民からも好評を博し、大量に用意する成果物も会の終了を待たず、在庫が尽きることもしばしばである。参加学生からは、毎回、学部・学年の垣根を越えての交流や達成感が声高に語られている。

3 学生参加による図書館運営の今後

図書館では、学生たちのイベント、プレゼンテーションなどの能動的学修行動に寄与する空間として、ラーニング・スクエアを提供している。ラーニング・スクエアは名古屋図書館正面出入口奥に位置し、50名程度の収容が可能である。可動式テーブル・椅子・ホワイトボードなどが設置されており、さまざまなグループミーティングに利用されている。

そのさらなる有効活用に向けても、図書館広報隊の活動の活性化・定着化は大きな役割を担うはずである。

コロナ禍が収束しても、以前とは異なった形でのサービスが図書館には求められよう。そうした制約的環境において、図書館運営に携わる教職員は、学生主体の協働施策が円滑に実施され、学生に何らかの経験を体得してもらえるよう支援を重ねていきたいと考えている。こうした小さな歩みが、やがては身近な図書館につながることを切に願うばかりである。



展示イベントの様子

【甲南大学】

学生によるブックカバーデザイン企画

— 甲南大学図書館の取り組み —

笹倉 香奈 甲南大学法学部教授 甲南大学図書館長

1 なぜブックカバーか

大学図書館に求められる役割は多様化し続けている。大学における学修・教育や研究を支え、時代の変化に対応するために何をしなければならぬのかが常に問われている。

学生の主体的な学びの場としての図書館の利用促進も、課題の一つである。そこで、図書館に関心を持ってもらい、図書館を利用してもらうための手段の一つとして甲南大学で開始されたのが、ブックカバーデザインプロジェクトであった。

プロジェクトの最大の目的は、学生に企画を通して図書館を身近に感じてもらうことである。さらに、オリジナルのブックカバーを

掛けた本を学生が大学外の店や電車などで読めば、広報という副次的な効果も見込めるという目論見もあった。

2 経緯

ブックカバーの制作を提案したのは、甲南大学図書館と共に日々図書館の管理運営業務を行っている甲南学園サービセンター(KSC)のスタッフであった。オリジナルのブックカバーを作成し配布するという試みは他大学でもすでに行われており、それに倣って企画されたプロジェクトである。

2011年に図書館との協議を経てKSCスタッフ自らがブックカバーをデザインするという試みが行われた。さらに翌年には学生からブックカバーのデザインを募集するようになった。初年度から12名の応募を得ることができ、グランプリ作品を決定した。現在ではグランプリ作品を選ぶ投票も、学生によって行われている。

オリジナルのブックカバーをデザインし、大学のWebサイトなどを通じてダウンロードできるようにしている大学は少なからずある。しかし、学生自身がデザインし、その中からグランプリを決定して配布するという試みは、全国的に

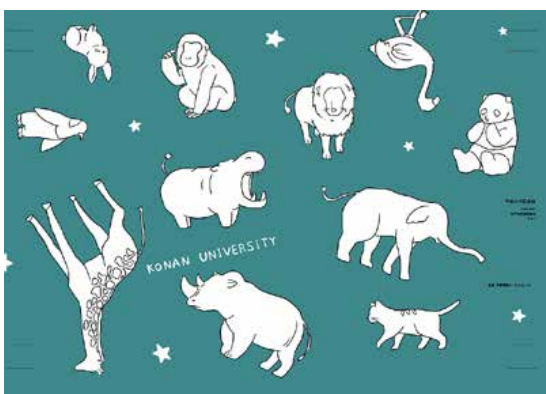
見てもまだまだ多くないようである。

デザインの条件は「甲南大学」または「甲南大学図書館」という文字(英語または日本語)をどこかに入れることである。これは、冒頭の広報の効果を狙った条件だ。

2012年以降もブックカバーデザインの応募は毎年あり、年間のブックカバー提供枚数は1000枚前後である。図書館内で配布している他、オープンキャンパスなどでも好評を得ている。オープンキャンパスに来る高校生にとっては、大規模な大学図書館や、そこで配布する学生デザインのブックカバーが新鮮に映るのではないか。

写真は、2019年度のブックカバープロジェクトのグランプリ受賞作品である。文学部英語英米文学科の北村彩華さんによるもので、誰でも使えるようにこだわったデザインである。深みのあるグリーン地に動物が描かれている。

美術部などに属さない学生でも、絵が得意であ



2019年度のブックカバー。デザインは文学部英語英米文学科の北村彩華さんによる。

るといふ者は多い。友人から依頼されて応募したという北村さんのカバーは、定番として長く使えそうなデザインである。

3 今後の展望

甲南大学においてブックカバープロジェクトは定着しつつある。しかし、課題もある。とりわけ応募数がまだ少ないため、今後はどのように企画を周知し応募数を増やしていくかが課題である。学内の他の部署との連携強化も必要だろう。

甲南大学図書館ではブックカバープロジェクトの他にも、KSCのスタッフを中心に、消しゴムハンコを使って蔵書票を作るという企画や製本体験なども実施している。これらに加え、外国語学習のための語学学習室での多読チャレンジや、甲南大学全体のプロジェクトであるKONANサーティファイケイトという評価認定制度の一環として「KONANライブラリサーティファイケイト」制度もある。

現在、COVID-19の影響の下、図書館にそもそも入館できる学生の数の制限などを行わざるを得ない。時代の変化や状況に応じてさまざまな仕掛けを考案することが、大学図書館にもますます求められている。